

台湾原住民族角力事情覚書

八木橋伸浩

はじめに

相撲を通じて琉球弧の位相を解釈する試みを開始したのは1998年であった。その後、韓国・台湾・モンゴルと調査地を拡大しつつ、東アジアのなかで相撲という文化はどのように位置づけられるのかを考え続けてきた。

韓国についてはすでに2010年に「相撲文化の東アジア的視点に基づく基礎的考察—琉球弧と韓国の事例から—」(田中宣一先生古稀記念論集編集委員会編『神・人・自然』慶友社、所収)として小稿にまとめる機会を得たが、2012年8月から9月にかけて実施した台湾での聞き取り調査の成果と2013年2月に実施した外モンゴルでの聞き取り調査の成果については未報告のままである。本稿では、そのうち、台湾での現地調査で知り得た内容について整理しておくこととした。まだ分析に至るほどの情報量には到達していないのが現状ではあるが、今後、東アジアの相撲文化を相対化するためにも覚書として活字化しておく。

なお、台湾原住民族社会における角力(相撲/シュアイツァオ)文化を分析する際に欠かすことができないと考えられる文献資料等に残された過去の調査記録の一端についても、本稿のなかで一部取り上げておくことにした。

台湾先住民族について

台湾には2013年現在、14に分類される先住民族が存在している。台湾と清国以来の中国との間で展開した支配と分断の歴史的経緯の詳細について本稿で述べるつもりはないが、元々この地に居住してきた諸民族からなる先住民族社会は、いくつかの支配変遷のもと翻弄され続けてきた。その歴史の概略だけは簡潔に記しておきたい。

先史時代以来、漢人が主体となる以前の台湾社会においては、その歴史の主人公は台湾先住民族であった。周婉窈の『増補版図説台湾の歴史』によれば、現在の台湾を構成している民族を示すものとして「四大群族」(四

大民族集団)という表現があるが、これは現在の台湾住民を福佬人・客家・外省人・先住民族の4つにわけたい方であり、ここでいう先住民族は一般的には高山族と平埔族に区分される。高山族は文字通り山に住む先住民族であり、平埔族は平地に住んで漢化が比較的進んだ先住民族を漢人移民が区分するために用いた呼称だとされる。また、清国は先住民族を基本的に「生番」「熟番」「化番」に分類していた。番は「蕃」と同意で、野蛮であることを意味し、先住民族を指す表現として用いられていた。そして、「生」「熟」は「教化を受けた」(漢化した)ことと「服属して納税する」か否かの判断基準を示し、そうであれば「熟番」、そうでなければ「生番」とされた。「化番」はその中間である[周 2013: 29-30]という。なお、殷允芃編『台湾の歴史—日台交渉の三百年—』によれば、「化番」には「帰化生番」の呼称もあったようである[殷 1996: 102]。いずれにしても「番」の呼称が発生したのは清国支配時代であった。

さて、元々は先住民族だけが暮らしていた台湾であるが、オランダが台湾南部に上陸した1624年当時、すでに先住民族と漢人が交易・通婚し、雑居していたという[殷前掲書: 101]。その2年後にはスペインが台湾北部に上陸したが、1643年にはオランダがスペインを撃退。1661年に鄭成功が侵攻してオランダを台湾から駆逐した際、南部の先住民族はほぼ恭順の意を示し、鄭は各集落の長老に明朝風の衣冠を贈って宴を設けたという[同前]。福建省台湾府として清国の支配下に置かれることになったのは1683年である。鄭氏支配以降、漢人女性が極端に少なくなったため先住民族の女性を妻にする者も多く、結果、先住民族の男性に妻が不足し人口激減が憂慮される事態となった。そこで1737年に清国政府は漢民族が番人と婚姻することを禁じ、違反すれば板百叩きの刑のうえ追放の布告を出している[殷前掲書: 102]。ちなみに、17世紀半ばの先住民族は4万人余、漢人は約1万人と推定されるが、1811年段階で漢族は200万人に増加し、平埔族は5万人程度になっている[同前]。福建省から独立して台湾省となったのは1885年であっ

た。17世紀後半から多数移住してきた漢人により先住民族はマイノリティーに追いやられ、そのほとんどが山岳の僻地に居住するようになったのである。

日清戦争終結後、1895年4月17日の下関講和条約により清国からの割譲を受けて台湾は日本領となった。下関講和条約第二条には、清国政府は日本に遼東半島・台湾・澎湖列島を割譲する旨が明記されている。これに応じて日本政府はすぐさま台湾統治の行政機関として台湾総督府を設置し、初代台湾総督に就任したのは海軍大将の樺山資紀であった。旅順にあった北白川宮能久親王が率いる近衛師団が台湾接收のために動いたのは同年5月のことである。その後、台湾に残った清国兵を中心とする台湾民主国軍との戦闘を経て、実質的な日本統治が始まるのは同年6月であった〔周前掲書：50-52〕。

後に首相となる桂太郎が第2代総督として着任したのは1896年。同年にはさらに第3代総督として乃木希典が着任した。知日派の実業家として知られ、司馬遼太郎の『街道をゆく一台湾紀行』において案内役も務めた蔡焜燦は、著書『台湾人と日本精神』のなかで、乃木希典が日本の台湾領有を「乞食が馬をもらったようなもの」と語ったことに対して、「これは馬も養えないような日本がどうして台湾など統治できようか、という意味で、当時の日本の国力で台湾を統治することは、決して容易なことではなかったことがうかがえる」〔蔡 2001：55〕と指摘する。当時の日本は大国・清国を打ち破ったものの、欧米が展開していた植民地経営同様の展開は国力的にはまだ困難をとまなうものだったのである。

蔡はさらに、「いざ統治に及んでは、いかなる施政も受け容れようとしなかった土匪（抗日ゲリラ）や蕃地（当時、原住民の暮らす村を『蕃社』、原住民を『蕃人』と呼んだ）の対策に明け暮れた」とし、「懐柔策を練り、堅固な警備制度をもって対処するが、散発的とはいえ抵抗運動の平定はたやすいことではなかった」〔同前〕と述べている。抗日ゲリラのみならず、山地に暮らす先住民族への対応に日本は苦慮したのであった。彼ら先住民族に対して台湾総督府は、懐柔策を含むあらゆる方法で帰順させ、蕃地の統治を図ろうとする「理蕃政策」で臨んだが、これは忍耐を要する一大事業であったという。同政策はいわば、ヤミ族以外は首狩りの慣習を持つ先住民族にその変更を迫り、彼らの日本化を目論むものであったといってよい。そうしたなか、第13代総督を務めた石塚英蔵の時代には「児童を含む日本人百三十名が蜂起した原住民に惨殺され、その討伐のために三百名を超える原住民が戦死する」〔同前〕という「霧社事件」

（1930年〔昭和5〕10月24日）も起きている。同事件は先住民族の帰順が進んでいた台中の霧社で起こったもので、日本の圧政に対して霧社に住む先住民族のタイヤル族の一部が武装蜂起した事件であった。日本による台湾統治内容の評価については意見のわかれるところでもあり、本稿の主旨とも外れるので言及は避けるが、少なくとも台湾に元々暮らしてきた先住民族社会との関係構築が容易なものでなかったことだけは確かであろう。

その後の台湾は、大東亜戦争の終戦を迎えた1945年に中華民国に接收される。そして中国国民党政権支配のもとで先住民族は中国化を強いられることになるのだが、以後の歴史については本稿では省略させていただく。

なお、既述した高山族の呼称は、1945年に成立した台湾省行政長官公署時代、政府側が日本時代の「理蕃」行政を引き継ぐかたちで先住民族を指す呼称として使われ始めたものである〔周 2013：28〕。

台湾先住民族の呼称とその分類

a. 原住民という呼称

蕃、高山族、平埔族、さらには高砂族や山地同胞など官側の命名による呼称が用いられてきた台湾先住民族であるが、こうした呼称に対して異議を唱え、自らの手で民族としての呼称を定めようとする動きがあった。それが1980年代に起こった「正名運動」である。日本統治時代や国民党政権時代の支配にあっていずれも同化を強要された先住民族であるが、その後の台湾経済の発展にとまなない、居住地から都会へ出る若年層が増加し、当時、居住地は過疎化が進展していた状態であった。

清国支配時代の「番」、日本統治時代の「蕃」、既述したようにこれら「番／蕃」の表現にはいずれも、まだ教化されていないという差別的なニュアンスがある。周婉窈の『増補版図説台湾の歴史』（前掲書）には、こうした差別的な状況を解消すべく1983年5月に国立台湾大学に所属する林文正（イバン・ノカン）他計4名の先住民学生が手書きの地下刊行物『高山青』を創刊、創刊の辞として檄文を発し、これが台湾先住民族運動の先駆けとなったこと、翌年には台湾原住民権利促進会が成立したことが紹介されている〔周 2013：251〕。反文化変容運動とも称することのできるこのような運動は文学、音楽、スポーツなどでも実践された。この結果、1994年の第三次憲法修正によって「台湾原住民」の呼称が公式呼称として定められたのであった〔周前掲書：79〕。そして、さらに1997年には「台湾原住民族」に改称され

ている。先住民族自らが、自らのアイデンティティを問
い直す動きの一つの帰結した姿をここにみることができ
よう。また、台湾独立の機運の高まりとともに、台湾人
としてのアイデンティティを模索する動きも顕著なもの
となっており、そのなかで台湾人の文化的な原点の一つ
に先住民族文化を位置付けようとする動向も確認されて
いる。先住民族文化の見直しともいえる状況は現在も続
いているといえるだろう。

「原住民族」という呼称は一見すると差別的な表現と
解釈することができないわけではない。そして、先住民
族の呼称の方が中立的であるとする解釈もある。しかし、
そうした解釈論はともかく、現在の台湾社会における最
も中立的な公式呼称であることを尊重し、本稿において
は「原住民族」の呼称を表題も含めて使用することにし
た。ここまでの記述では混在していた先住民族／原住民
族の表記について、これ以後は「原住民族」の表記で統
一することとする。

b. 原住民族の分類①

さて、では台湾原住民族と呼ばれる人々はいくつの民
族から成り立っているのであろうか。実は、この民族分
類に関しては現在もなお論争が続いており、いくつかの
分類法が存在している。これまで最も一般的とされてき
たのは以下の分類である。

表1のように、高山族は9族、平埔族は10族に分類さ
れる。これは2001年以前に一般的とされていた分類に
もとづくものであるが、「サオを平埔族と見なすかどう
かは学者の間でも論争がある」「カウカウの所属も不明
であり問題」があり、現在はクヴァランやパゼッヘなど
がかろうじて一脈を伝えているものの、他の平埔族は民
族名のみでの存在で実体をともなわず、族譜や土地契約書、
祭祀儀礼などのなかにわずかな痕跡が辿れるばかりの現
状である〔周前掲書：30〕という。さらには、こうした
実態をともなわないにもかかわらず、例えば学術的な分
類ではケタガラン族は「バサイ」「ルイラン」「トルビア

表1 高山族・平埔族の分類

高山族	タイヤル、サイシャット、ブヌン、ツオウ、ルカ イ、パイワン、プユマ、アミ、ヤミ（タウ）
平埔族	ケタガラン、クヴァラン、タオカス、パゼッヘ、 パボラ、バブザ、ホアニヤ、サオ、シラヤ、カウ カウ

註：周婉窈『増補版図説台湾の歴史』（前掲書：30-31）をもとに
筆者作成

ワン」の3部族にさらに細分化する指摘があるなど、平
埔族の民族分類は結論を得ていない。

平埔族がこうした状況に至った最大の要因は、「彼ら
の子孫の圧倒的多数は、漢人社会に『融合』してしまっ
ている」〔同前〕ためである。清朝末期には平埔族は漢
人とほとんど区別がつかず、日本統治時代には彼らの生
活は漢人とほぼ同様に本来の姿は失われ、新年の行事や
祖先祭祀の時に伝統的な姿の一端が示されるのみとなっ
た〔殷 1996：102〕。つまり、現在、原住民族の呼称に
値するのは基本的に高山族といってよい状況にある。そ
して、高山族は台湾東部に広く分布する地理的な特徴を
有している。

なお、2001年8月にサオ族が原住民族としての認定を
受けて以来、2009年3月までにサオ、クヴァラン、トゥ
ルク（タロコ）、サキザヤ、セデックの計5民族が新た
に加わり、現在はこの14民族を原住民族と認識する状
況となっている。台湾行政院の原住民族委員会作成の
「先住民族分布図」（図1参照）によれば、当該14民族は
下記のとおりである。

タイヤル（Atayal）、サイシャット（Saisiyat）、ブヌン
（Bunun）、ツオウ（Tsou）、ルカイ（Rukai）、パイワン
（Paiwan）、プユマ（Puyuma）、アミ（Amis）、ヤミ（Yami
／タウ）、サオ（Thao）、クヴァラン（Kavalan）、トゥル
ク（Truku／タロコ）、サキザヤ（Sakizaya）、セデック
（Sediq）。

これら民族の現況を台湾の現地旅行社などが発行する
パンフレットその他の記載をもとに簡単に紹介しておく。
なお、人口は2012年8月現在のものである。

○タイヤル族……人口約8万3300人。中央山脈に居住。
30ほどの村単位の部族に分化される。毎年5月に豊年

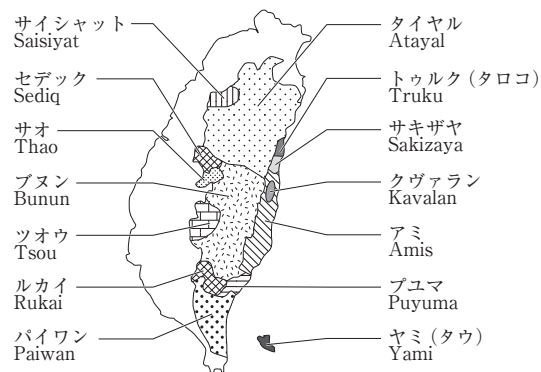


図1 現代台湾先住民族分布図

註：台湾行政院原住民族委員会作成〔周婉窈『増補版図説台湾の
歴史』（前掲書：31）より転載〕

祭を執行。

- サイシャット族……人口約5600人。タイヤル族居住地域の西端である竹東の山地に居住。タイヤル族に近いとされる。小人伝説にもとづくバスタアイ(矮霊祭)を農耕儀礼と習合させたかたちで執行。
- ブヌン族……人口約5万4100人。中央山脈中央部の山岳地帯に居住。住居移動の慣習を有す。大家族制のもと、大氏族・中氏族・小氏族の細分化された氏族制度を有し、同族内禁婚の慣行を厳守してきた。日本統治に最後まで抵抗した民族。射耳祭を執行。
- ツオウ族……人口約6500人。中部山岳地帯西側、日月潭、阿里山付近に居住。
- ルカイ族……人口約1万2400人。中央山脈南部の霧台地区および高雄近郊の茂林郷に居住。首長層と平民層からなる明確な身分的階級制度と世襲首長制を有す。畑作農耕を営み、層状に分断される鉄兵石を使用した石造堅穴式住居を特徴とした。
- パイワン族……人口約9万3000人。中央山脈南部の高地に居住。ルカイ族同様、首長層と平民層からなる明確な身分的階級制度と世襲首長制を有し、石造堅穴式住居に住む。
- プユマ族……人口約1万2800人。台東西側の平地に居住。規律正しい部族として知られ、山地王と称された全盛期には確固とした社会組織と軍隊を有した。
- アミ族……人口約19万3600人。原住民族中最大の人口規模を誇る。花蓮から台東の東海岸一帯と海岸山脈の両側に居住。他民族と異なり明確な母系制社会を形成。言語と習俗の違いから5支族に分類される。旧暦8月15日の中秋前後に執行する豊年祭が最大の祭り。
- ヤミ族……タウ族とも。人口約3500人。唯一の島嶼居住民族で蘭嶼島にのみ居住。近年まで禪姿であったことから裸族と称された。独自の堅穴式住居に居住し、男性は一生の間に何度も改名するのが特徴。海開きとして飛魚節の儀式を執行。
- サオ族……人口約600人。日月潭付近に居住。2001年、独立した民族に認定。
- クヴァラン族……人口約1100人。宜蘭市と蘇澳市蘭陽平原一帯に居住。2002年に11番目の民族として認定。
- トゥルク族……タロコ族とも。人口約2万8200人。花蓮北部に居住。2004年にタイヤル族から分離し別民族として認定。
- サキザヤ族……人口約5000人～1万人。アミ族の一部とされていたが言語体系の違いから2007年に12番目の民族として認定。

○セデック族……人口約8000人。タイヤル族の一部とされていたが、2008年に14番目の民族として認定。

c. 原住民族の分類②

だが、この14民族分類にもとづかないデータも存在している。2012年に筆者が台北市で入手した「101年原住民族名称」(出典不明)によれば、中華民国暦101年(2012年)現在、台湾各地において原住民族が集住する集落は154か所あり、そこには6民族が展開しているとされている。台湾の行政単位は「県(縣)」の下に「郷・鎮」があり、さらにその下部に「部落」が位置する構造になっているが、郷・鎮別にそこに集住する各原住民族を「101年原住民族名称」にもとづいて整理すると以下のようになる。

- ・大武郷には大鳥・南興村など計5部落に排灣族が集住。
- ・太麻里郷には多良村瀧部落ほか計9部落に排灣族、新香蘭沙薩拉(阿美部落)ほか計3部落に阿美族が集住。
- ・台東市には建農部落ほか計6部落に卑南族、加路蘭部落ほか計12部落に阿美族が集住。
- ・成功鎮には麻荖の荖部落ほか計13部落に阿美族が集住。
- ・池上郷には大埔部落ほか計9部落に阿美族が集住。
- ・卑南郷には刺桐部落ほか計3部落に阿美族、利嘉部落ほか計4部落に卑南族、東興部落に魯凱族が集住。
- ・東河郷には阿奚露艾ほか計10部落に阿美族が集住。
- ・金峰郷には卡阿麓灣ほか計27部落に排灣族が集住。
- ・長濱郷には加走灣ほか計15部落に阿美族、大峰峰に噶瑪蘭族が集住。
- ・鹿野郷には永隆部落ほか計6部落に阿美族が集住。
- ・達仁郷には土坂村ほか計11部落に排灣族が集住。
- ・關山鎮には里攏隆興部落に排灣族が、電光部落ほか計3部落に阿美族が集住。
- ・延平郷には永康村ほか計5村に布農族が集住。
- ・海端郷には加拿村ほか計7部落に布農族が集住。

このデータにしたがえば、現在、台湾に居住する原住民族は排灣族・阿美族・卑南族・魯凱族・噶瑪蘭族・布農族の6民族で、行政院の原住民族委員会が認定した14民族分類とは異なる。これは、2001年以来に新規認定された民族を除外したわけでもないが、詳細は不明である。この6民族のデータを居住地別に整理すれば表2のようになる。

平埔族のほとんどが漢人との融合によって漢人化してしまったこと、このため原住民族としての確認に現在も学術的検討が施されていること、こうした状況は原住民族という枠組みが今後も議論の対象となることを示唆し

表2 6民族の居住地別一覧

民族名	居住地
排灣族	大武郷の大鳥・南興村など計5部落、太麻里郷の多良村瀧部落など計9部落、金峰郷の卡阿麓灣など計27部落、達仁郷の土坂村など計11部落、關山鎮の里攏隆興部落
阿美族	太麻里郷の新香蘭沙薩拉（阿美部落）など計3部落、台東市の加路蘭部落など計12部落、成功鎮の麻老の老部落など計13部落、池上郷の大埔部落など計9部落、卑南郷の刺桐部落など計3部落、東河郷の阿奚露艾など計10部落、長濱郷の加走灣など計15部落、鹿野郷の永隆部落など計6部落、關山鎮の電光部落など計3部落
卑南族	台東市の建農部落など計6部落、卑南郷の利嘉部落など計4部落
魯凱族	卑南郷の東興部落
噶瑪蘭族	長濱郷の大峰峰
布農族	延平郷の永康村など計5村、海端郷の加拿村など計7部落

註：「101年原住民族名称」（出典不明）にもとづき筆者作成

ているが、現実的には民族によって人口規模に大きな差があり、このためいくつかの特定民族に原住民族の概念が特化される可能性も否定できないものと思われる。

ブヌン族の角力

a. 延平郷のブヌン族

現在、台湾において原住民族の人口比率が高いのは台湾東部の太平洋側であり、台東市や花蓮市がその中心である。なかでも人口約23万人で台湾東部最大の都市である台東市は、もともと原住民族の村があった場所につくられた都市であるため、原住民族は人口の約半数を占めており、台湾の主要都市のなかで最も高い比率を示している。この台東市の中心部から車で1時間ほど移動した延平郷はブヌン（布農）族の暮らす静かな山間地である。

延平郷は台地上に展開する地形で、東は鹿野郷や卑南郷と接している。鹿野郷の鹿野溪南側にはブヌマ（卑南）族が居住しており、ここにはかつて日本からの移民集落もあった。

なお、ブヌン族は前述したとおり、人口は約5万人規模で、大家族制や大氏族などの細分化された氏族制度を



写真1 布農部落休閒農場入口 [筆者撮影]



写真2 布農部落の看板 [筆者撮影]

有し、同族内禁婚の慣行を厳守してきた民族である。日本統治に最後まで抵抗したことで知られる。

この延平郷桃源村にはブヌン族の人々が運営する布農部落休閒農場（写真1・2）がある。ここはブヌン族の生活慣習などを紹介するテーマ村となっており、世界的な知名度を誇るブヌン族の混声合唱や舞踏の披露が行なわれるほか、伝統料理や工芸品のコーナーなどもある。また、宿泊施設もあり、当該施設ではブヌン族の生活の一端を体験することが可能である。2012年8月27日、当該休閒農場において聞き取り調査を実施した。

b. 射耳祭

当該施設で働く40歳代のブヌン族女性従業員によれば、毎年4月、2日間をかけて郷内の中学校で射耳祭を行なっている。この祭りのなかに力比べの行事（試合）があり、角力と弓が実施されている。

この祭りで行なわれる角力の試合には成人した若い男性が参加し、未成人はやらない。獵師が弓の訓練をやるのと同じ意味で角力の訓練もなされてきたという。そして、試合を行なうのは成人のみで、未成人の子供たちは訓練のみ行なってきた。だが現在、角力をするのは成人のみとなったという。子供たちは今はやらなくなってし

まった。

c. 温書亜氏に聞くブヌン族の角力

温書亜（台湾名：ウン・スヤ／ブヌン名：Istanda husuug Bali インタンダフスン・ダリ）氏は2010年に実施されたブヌン族の運動会全国大会の角力競技部門で優勝した人物である（2012年8月時点で大学3年に在籍しているが休学中とのことであった）。

以下、温書亜氏の語りから、ブヌン族の角力について整理しておきたい。

彼の住む桃源村では4月に実施される村の運動会の競技の一つとして角力が行なわれる。その後、各村で優勝した人を集めた郷単位の運動会が行なわれる。そこでは、村vs村の試合が実施されるが、各村では代表5人を選出、先に3人勝った方が勝ちとなる。勝ち残った村が郷の代表になる。こうした郷の代表者を集めたブヌン族の全国大会は毎年10～11月に実施されている。つまり全国大会は郷の代表者が出場する郷vs郷の試合というわけである。2012年からはバレーボールとバスケットボールの試合も加わった。なお、2012年の全国大会は高雄で開催されるという。そしてこの大会が終わったら、次年度の開催場所を決定することになっている。

現在、角力の練習は基本的に行なわない。大会の当日に先輩から教えられ、そうして覚えるのがふつうである。以前は小さいころから角力のトレーニングをして鍛えたそうだが、今の子供は特に鍛えることもしないという。

ふつうは体操着のズボンを着用するのみで上着は着ない。そして、互いに帯（紐）を持ち合う姿勢から組み合せて始める。規則として、帯から手を離してはいけないことになっている。

行なうのは砂の上である。砂は円形の土俵のようなかたちに50センチメートルくらい盛り上げる。ここから外に出ってしまったら戻って再開する。試合は膝か背中が地面についたら負けになる。投げ技もあるが、これは少ないケースだという。手と足を使って相手の膝を地面につかせるのがふつうの取り方。彼は体格的に大きいため、上から体重をかけて相手を潰すのが得意技だという。試合の相手は同じ体格でなくてもよく、抽選で相手を決めるシステムになっている。建前としてくじ引きをするのだが、ほとんど勝手に相手を決めるので、平等性はないとのことであった。

角力を取る人は平均して体重80～100キログラム。体の大きな人が角力をするという。ちなみに温書亜氏の身長は191センチメートル、体重は180キログラムである



写真3 延平郷のブヌン族／温書亜氏（右端／中央は筆者）

（写真3）。彼はかつて日本の相撲部屋からスカウトがきたがこれを断っている。2012年現在、全国には体の大きいライバルが5～6人いるとのこと。なお、温書亜氏の父も祖父も体が小さくて角力はしないし、家族のなかで角力をしているのは自分1人だけであるとのことであった。

審判（行司）はツァイパンという。村の運動会での審判については、昔、全国大会に出た人と地元の役所の人がこの役を務めている。

試合に勝つと生きた豚が賞品として与えられ、優勝者は頭の部分をもらえる。それはとても名誉なこととされている。温書亜氏の祖母は豚の頭をもらった時、大変喜んだという。そして、たとえ負けても豚を解体する行事には参加するのが慣例とのことである。肉は結婚式でもよく出される大切なご馳走で、現在もそれは変化がない。ただし、以前は豚ではなく猪が勝者に与えられたが、25年以上前に豚に変わったとされている。豚は脳味噌や皮も含めてすべての部分が食べられるので、基本的には煮込んで食べるという。最後はストローで吸えるくらいまで煮込むとされる。

なお、温書亜氏は2011年には角力の全国大会出場も取りやめ、柔道に転向した。これは先輩が柔道に移ったことが原因だという。しかし、柔道に転じたものの、体格的に違いがあり過ぎるため、練習相手が1人か2人しかいないという問題があるとのこと。この人を相手に台東中学校で練習しているそうである。

d. 温書巫氏の語りから

温書巫氏の語った内容を少しだけ整理しておこう。

着衣や砂地という条件からは韓国相撲のシルムを思わせる部分があるが、帯を掴んだ状態から試合が開始される点は琉球角力の形態に近い。また、膝や背中が地面に着いたら勝敗が決まる形態は、日本の大和式相撲、韓国のシルム、モンゴル相撲ブフなどと共通している。勝者に与えられる肉の贈与についても、豚ではなく牛ではあるが、琉球角力、シルムなどに共通する要素であり、今後の比較検討がなされるべき事項といえるだろう。

また、ブヌン族以外も角力を取るのかという筆者の質問に対して、温書巫氏はプユマ（卑南）族だけだと思いと回答した。プユマ族については財団法人廣播電視事業発展基金が製作した『青山春暁 5卑南摔角』に彼らの角力の様子が記録されるほどであり、原住民族社会のなかでプユマ族の角力に対する認識が他民族以上に高い可能性はある。いずれにしても、実体としては他の原住民族も角力を行っており、彼の回答は延平近郊の卑南という地理的環境を重視した限定的なものである可能性もあるが、原住民族同士でそれぞれの文化を共有するという認識が積極的でない可能性も否定できない。こうした点も今後の検討課題といえよう。

e. 文献に記されたブヌン族の角力

台湾淡江大学図書館で2012年2月に拝見した達西烏拉灣・畢馬（田哲益）著『台湾布農族風俗図誌』（1995年、常民文化事業有限公司）には、ブヌン族の角力について次の記載がある。「布農族人的休閒生活娛樂・大多是爭勝鬥強的娛樂・如背載重物、角力互相弄倒對方、比賽爬樹等」[達西烏，他 1995：81]とあり、日常生活のなかでの娛樂として角力が位置づけられていることがわかる。

アミ族の豊年祭と角力

a. 豊年祭と日本の盆踊り

台湾において現在、原住民族の人口比率が高いのは台湾東部の太平洋側で、台東市や花蓮市がその中心であることは既述したとおりであるが、この地域最大の人口規模を誇るのがアミ（阿美）族である。現在、人口19万人を越す農耕民族アミ族は、母系制社会を特徴としており、基本的に家督は女性が相続・継承する。生活上で女性は様々に優位な側面を持つが、政治的な側面では男性が主導的役割を果たす。それが頭目や長老と呼ばれる男性である。



写真4 アミ族の女性の踊り（於：花蓮県吉安郷・阿美文化村）
[筆者撮影]

彼らは数多くの祭事を年間に執行しているが、なかでも最大の行事は豊年祭であるとされる。豊年祭はイリシシと呼称され、旧暦8月15日の中秋前後に7日7晩にわたり踊り続ける最大規模の祭事として行なわれてきた。夏の収穫後、一年の豊作に感謝する農耕儀礼であり、収穫感謝の性格を帯びている。現在では旧来の姿を伝える伝承地は少なくなったものの、一部の村では昔ながらの形態を保持し続けているとされる。

祭りの最大の特徴は彼らの独特な歌と踊りである。祭礼開始時には男性のみ踊り、その後、女性も加わる形態が通例で、基本的には年齢階層ごとの組になって踊る。この年齢階層は、成人男女、年長婦人、既婚婦人、少女、少年、幼児などに区分されている。特に華やかな女性の踊りは見事とされる(写真4)。なお、こうした形態になった背景として、日本統治時代の日本文化の影響があることはすでによく知られた事実である。

日本人移民による盆踊りの要素が大きく反映されているとされ、これは豊年祭開催時期も含めた日本の盆行事の影響を受けた結果とされている。盛大な集団舞踏コンクール形式へとスタイルを転換させたのである。村によっては集落のシンボルとして大きな見張り用の櫓を有しているが、この下で踊る様はまさに盆櫓の周囲を回って踊るスタイルを彷彿とさせるものがある。現在、都会に居住する出身者が村へ帰省する要件の一つとしても機能しており、この点も含めて日本の盆行事との関連性は興味深いものがある。また、日本統治時代の影響から豊年祭のなかに運動会的要素を盛り込んでいる場所も少なくなく、競走や綱引きなどが行なわれるケースもある。これは、前述したブヌン族が積極的に運動会を実施していることも同様の事情によるものと考えてよい。

b. 花蓮のアミ族の角力

台湾三大国際港の一つとしても発展した花蓮市は花蓮県の県庁所在地で、日本統治時代の面影を残す建物なども少なくない。また、台湾を代表する景勝地である太魯閣渓谷の入口としても知られている。そして、日本統治時代から人が住み始め都市として発展してきた。このため日本式の木造住宅も建てられ、現在もそのまま残る日本式家屋は少なくない。ちなみに、四国の徳島県出身者が開拓し移住した村に花蓮県の吉野村があるが、この吉野村の名は徳島県の吉野川からきている。

既述したように、花蓮市は原住民族比率の高い代表的な都市でもある。花蓮県に住む原住民族は多いが、アミ族はなかでも多数を占めている。そして、アミ族のなかには前述したように日本統治時代の影響から豊年祭のなかに競技要素を盛り込んでいる事例がみられるようである。市内から少し離れた花蓮県吉安郷仁安村にはアミ族の舞踊文化を公開している阿美文化村があり、2012年8月30日、同所でアミ族の舞踊を拝見したあとアミ族の若者から聞き取り調査を実施した。

話者は、小学校時代に角力のチャンピオンになったという張念慈氏（20歳〔調査時〕／アミ名：安古スグイ／花蓮県吉安郷東昌村在住）と、2011年にアミ族の大会で角力のチャンピオンになった陳兆宏氏（16歳〔調査時〕高校生／アミ名不明／花蓮県吉安郷干城村在住）の2人である（写真5）。張氏は見事な刺青を上半身に施した青年、陳氏は舞踊はアルバイトとして行っている学生で、翌日も学校があると話してくれた。

2人が所属する花蓮県のそれぞれの村では、現在も、豊年祭の際には年齢階層別に角力を取っている。これは、子供から中年以上までが対象という。豊年祭は村の中学校の校庭でやるのがほとんどで、花蓮の場合は村ごとに日程が毎年異なるという。そして、郷のレベルまでの集



写真5 花蓮県のアミ族／張念慈氏（左）と陳兆宏氏（右）
（於：花蓮県吉安郷・阿美文化村）〔筆者撮影〕

まりが、祭りや角力の単位になっているとのこと。また、普段、角力の練習をすることは特にないとのことであった。

角力のスタイルや方法は日本とまったく同じで、このやり方は日本の統治時代に定着したと2人とも聞いているという。土俵があり、押し出されたり、投げられたりしたら勝負が決まる。土俵は円形で、中央に立ち合いのための線が1本引かれる。角力を行なうにあたっては、上半身裸になる。短パンをはき腰に紐を巻くが帯は締めない。「はっけよいのこった」の立ち合いで対戦が始まるという。

行司役の審判は、角力をよく知っていて強い人か専門の審判、あるいは村で一番偉い人（村長など）がつとめる。

角力に勝った人の賞品は、現在は油とか生活用品であるが、昔は豚を1頭丸々もらえたという。2人とも、角力は昔からの行事なので、それを単純に継続しているだけのことだと語っていた。

なお、アミ族は台湾全土で172の居住地（小さい村）があり、全国に分散してアミ族は居住しているとのことであった。

c. 台湾東部の豊年祭と角力（補足）

台東でタクシードライバーを営む呂蒼輝氏（50歳代）によれば、台東あたりでは7月の初旬から中旬にかけて豊年祭が各地（各村）で行なわれるとのこと。また、海の砂浜で角力を取るが、これは毎年のことではなく、原住民族の諸民族が合同で行なっているという。

1930年に台北市で生まれ、その後花蓮市に転居した日本語堪能な李永鎮氏（花蓮市老人会理事）からもお話を伺った。氏によれば、お会いした8月30日時点ですでに花蓮のほとんどの地区の豊年祭は終わってしまったが、一番最後に行なわれるのは9月1日に七星潭で16時から開始される豊年祭とのこと、原住民族の男たちは皆、豊年祭で角力を取るとのことであった。氏も豊年祭で彼らが角力を取っているのを何度も見たという。

また、花蓮市内には日本人が居住していた痕跡でもある建造物が多々残存しており、こうした建物を利用して日本統治時代の花蓮の様子などを紹介する施設で李氏は解説のボランティアをしているが、そこには当時の軍属たちが暮らした家屋などが保存されている。氏によれば、日本の将校たちが相撲を取ったりしていた姿も見たとのことである。同所には剣道場や柔道場もあり、台湾原住民族社会の拠点に同居する日本文化が彼らに影響を与え

なかったわけがないのである。

ちなみにアミ族の事例ではないが、既述したプユマ(卑南)族の角力の様子を記録したビデオ『青山春暁 5 卑南摔角』(財団法人廣播電視事業發展基金)のなかで展開される角力は、まさに日本式の相撲スタイルそのものであるし、劉還月編著の『臺灣原住民祭典完全導覽』(2001年、常民文化事業股份有限公司)に記載されたプユマ族の連合豊年祭の説明のなかには「知本著名的摔跤活動・也可以在連合豊年祭中看到」(知本で有名な摔跤[角力/レスリング]のイベントで、連合豊年祭のなかでみることができる)の文章とともに、内部に砂が盛り上げられ藁束で囲まれた円形の土俵のなかで上半身裸で角力を取る少年と行司役の男性が写った写真6が掲載されている。また、王煒昶の撰文・撮影による『台灣原住民族祭典的盛會』(2004年、南天書局有限公司)にも「摔角一格鬥技巧的訓練」(レスリング—戰鬥技能訓練)のタイトルのもと、写真7・8 [王 2004: 342-343] のようなプユマ族の角力の様子が掲載されている。「摔角是卑南族傳統的競技項目之一，藉此訓練男子的格鬥技巧，於每年的七月中旬收穫祭時舉行」[王前掲書: 342]とあり、摔角(角力)はプユマ族の伝統的な競技であり毎年7月の收穫祭の時に行なわれていることがわかる。なお、写真7には「國小五、六年級的少年，摔角已有大人的架式」，写真8には「壯年組的摔角最為激烈，爆發力也最強」のキャプションが添えられている。原住民族の伝統的な競技という位置づけであるが、一見してわかるように日本の村の相撲を彷彿とさせる形態であり、日本文化がもたらした影響と考えるのが妥当であろう。

しかし、一方で、写真9は1912年、当時台北市に居住していた成田武司が編纂した『台湾生蕃種族写真帖』(成田写真製版所)所収の一枚で、プユマ族の「珍妙なる相



写真7 プユマ族少年の角力(註:王煒昶『台灣原住民族祭典的盛會』より転載)



写真8 プユマ族壮年の角力(註:王煒昶『台灣原住民族祭典的盛會』より転載)



写真6 プユマ族連合豊年祭での角力(註:劉還月編著『臺灣原住民祭典完全導覽』より転載)



写真9 1910年頃のプユマ族の角力の様子(註:成田武司『台湾生蕃種族写真帖』より転載)

撲」をとらえている。成田は「両名の児童、互に其頭髮をつかみて其一方を引倒さんとつとめ、引仆さるも降参の一言を発せざれば勝敗定まらずと云ふ聊か乱暴なれども面白き相撲あり何れも奇習の一に算すべきなり」[成田 1912：108-109]と解説している。プユマ族の角力は本来、こうした児童遊戯的なものであったことがわかる。

d. 台北のアミ族の豊年祭と角力

台北市に居住する萬美芳氏は台北市で商売を営む50歳代のアミ族の女性である（写真10）。数年前に台湾の淡江大学から玉川大学リベラルアーツ学部へ妹さんが短期留学されたご縁で、今回の訪台にあたりお話を伺う機会を得ることができた。2011年の台北市市議会議員選挙にもアミ族の代表的存在として立候補された経験を有している。2012年9月1日、台北市内のホテル兄弟飯店で聞き取り調査を実施した。

萬氏によれば、2012年現在、台北市内には子供も含めると1万2000人程度のアミ族コミュニティが有ることである。また、興味深いことに、台北市在住の原住民族はふだんは教会に集まるといふ。理由はよくわからないが、原住民族の8割はキリスト教徒だと萬氏はいふ。台北市在住の原住民族のほとんどが日曜日には教会に集まるとのことであった。

市内の板橋や蘆洲などでも豊年祭は行なわれている。豊年祭を実施するのは8月末の土・日曜日。2012年は残念ながら既に終了しており、拝見することはできなかった。会場は運動施設（体育館、運動場、野球場など）で行ない、2012年は台北市体育館で実施された。台北市で行なう場合は、だいたいこの施設を利用しており、



写真10 台北市のアミ族／萬美芳氏（右側／左は筆者）

2012年は4000人近くの台北市在住アミ族が集まった。基本的に自由参加で、参加に強制力はない。いずれの場所の豊年祭でも内容はほとんど同じで、踊りと神様のお祀りなどが中心である。ただし、台北市では角力はやらないという。萬氏によれば、角力を行なうのは台東県の都蘭や花蓮県の太巴塹といった大きな集落だけではないかとのことであった。こうした場所では角力は盛んだという。花蓮の太巴塹は自身の父親の出身地で、自分の郷里にあたる場所だと語る。この2か所では、18歳で成人となる成人式で行ない、角力は成人式でのみ行なっているという。

この点については、既述した花蓮のアミ族の若者が豊年祭で角力をとるといふ語りとは認識が大いに異なっていることがわかる。女性であり角力に直接関与しないためか、台北市に居住しているため市内の限定的な状況しか把握していないためか、あるいは豊年祭という認識と成人儀礼という認識に誤解があるのか、短時間のインタビューでは世代的な背景も含めたその理由を解明するには至らなかったが、同じアミ族とはいっても台北市居住者と台湾東部に居住する人たちには認識にズレがある可能性は否定できないだろう。

そして、台北市原住民族運動会でも角力はやっていないとのことであった。

なお、萬氏は台東市と花蓮市の豊年祭の主催者と連絡が取れるとのことであった。また、氏の母親（現在90歳）は昔のことをよく覚えているので、小さいころに見た角力のことも覚えているはずとのこと。さらに氏の弟は昔の原住民族の歴史を日本語で書かれていたものを台湾語に訳す仕事をされているという。以上の点を確認するための追跡調査は今後の課題である。

原住民族に関する記録のなかに窺える角力

台湾原住民族の人類学的調査は、まさに日本による統治支配の時代になされた。なかでも1928年に創立された台北帝国大学（台湾大学の前身）を中心になされた調査が本格的で、本稿ではその一部ではあるが原住民族の角力に関する記述を抜き出し、紹介しておくことにした。台湾における原住民族社会の文化を紐解き分析・検討するためには、この成果が貴重な情報となる。

本稿で取り上げるのは、古野清人が1945年に刊行した『高砂族の祭儀生活』（三省堂出版）である。現在は入手することが難しくなった一冊であるため、1996年に南天書局有限公司（台北）が再刊したものを使用した。

なお、本稿中のアンダーラインは関連する記述として重要と思われる部分に筆者が施したものである。

a. 社について

まず、記述中に出てくる「社」について、同書の説明を引用しておく。同書第六章「高砂族農耕儀礼の諸相」には、「社 (kalan, alan)」とは「部落」と同じ意味〔古野 1945: 175〕で、ガガー（血縁的集団）と社（部落）の関係については「現在では著しく錯雑してゐて原初形態を的確に把握することは頗る困難である。社とガガーとの関係は根本としては一社が一ガガーを構成してゐたとの仮定から出発して差支へあるまい。しかるに、社の人口の膨張は家族の移動分散を促し原社が数社に分裂するに至つたであらう。この分社に際してガガーをも分つことがあり、他方また一社の内部にあつてガガーの分裂を招く場合もあらう。現実に社とガガーとが合致してゐる場合と数社が一ガガーを構成する場合と数箇のガガーが一社を構成する場合が想定される所以である。しかし、この種の問題に関する広汎な組織的な調査は未だなされてゐない」〔同前: 175-176〕としている。

b. アミ族の事例

アミ族については、同書第七章「アミ族南勢蕃の祭祀組織」のなかで「台湾高砂族の阿眉族（東海岸地方の平地に沿ひ細長く南北に伸びて分布し、最大の人口を擁する部族）」〔同書: 213〕と紹介している。そして、「アミ族トラン社の農耕儀礼」の章のなかで同社の成年儀礼に関して触れ、次のように記述している。

「粟祭が終つて一箇月位たつと、すぐ上の組の者が或日早朝に未成年者 (pakarungai) に新しい着物をきせる方法を教へる。このお祝ひをパカヤパイ pakayapai といふ。pa - kayap とは禪の代りの腰巻を着せることである。これまでは子供は夏などは全くの裸体である。但し、この場合に、青年達はあたりまへに着せないで、いろいろと悪戯をする。このことを maatsang とか maraora とか呼んでゐる。これが済めば以前はマラオロタイ (maraorotai) といつて喧嘩みたいに髪の毛を掴み合つて倒す競技をした。元は本島人のやうに男子は辮髪⁽¹⁾であつた。このマラオロタイはお祝ひで別に禁忌はない」〔同前: 47〕

※註 (1) 「この角力がまた粟の豊饒を祈るためのものであつたことは、『蕃族調査報告, 阿眉族蕃』, 261頁を参照」〔同前: 48〕

また、同書第三章「アミ族農耕儀礼の諸相」のなかには以下のような記述がある。

「アミ族の社会では以下において触れる如く農耕儀礼と目さるべきものが、われらの社会では既に全く分化して無関係とされてゐるものと未だ著しく緊密な有機的関係にあることを示唆しうる。収穫祭のマリクダ踊の如き、単なる舞踏の衝動から行はれるものでなく、その背面には常に作物と関連した意図或ひはひろく儀礼的效果をねらつた意図が存してゐることを窺知しうるのである。角力や恐らく縄引の如きものも本来はかかるものとしてその深い意味を把握すべきである。このことは前にも記した団体的な狩猟、首狩の場合にも亦通用するのである。われらの社会では既に世俗化して独立してゐるスポーツ、遊戯が未開社会では未だ祭儀的要素を多分に保有してゐるのである。ここでは美学的現象は呪術宗教的現象と不可分の関係にある。アミ族生活の全体はまさに彼等の生命線である農作物を円饒して展開してゐるのである。よつて社のあらゆる生活行事が多少とも程度を異にして農耕上の祭儀に凝集してくるのは極めて自然であらう。アミ族はそのもつカウスに関する観念を通して宇宙を人生を社会を解釈し、そしてカウスとの相関関係において農耕の諸儀礼を種々な方面に展開せしめてゐるのである」〔同前: 84〕

ここでは、角力と同様のものとして「縄引」を取り上げているが、この「縄引」のことと思われる「綱引」についても同章のなかで触れている。粟の収穫慣例の儀礼について概観したあと、次のように記している。

「かくして粟が成熟すれば粟収穫の儀式を司る本家であるパロアイに頭目 (パプロアイ) やカキタアンが集つて祭儀を協議する。翌日はバリダスといつて、粟穂を縛るバリダスの用意をするミヅチクする。この日に綱引 (masasurat, mibiyaga) を行ふ。年齢階級の組でやることもあり、道を境界にして両区域の男女子供が行ふこともある。その翌日がミバリダスで、バリダスを作る。それから二日置いて三日目にミサ・ポオト (misa-poot) である。ポオト即ち小刀の準備をする儀礼である。朝、各戸に男の祭司 (sirisinai) がきて、小刀を用ひるとき怪我しないやうにとミヅチクする。その翌日にまた神霊にミヅチクして、実際に粟を刈る」〔同前: 88〕

さらに同書第七章「アミ族南勢蕃の祭祀組織」のなかでも、五月中の粟収穫祭 (mi-havaai) のなかのミバリダス (mi-baridas) という行事について触れ、そこでも綱引が行なわれる事実を記している。

「バリダスとは山棕櫚の葉。行事する家はパロアイである。昔はバリダスの葉を乾かして粟を縛つたものである。また藤の用意をする日でもある。竹を破つて細くす

る。これらは綱引きの用具になる。老人達(マトアサイ)は野に山棕櫚の葉を取りに行く。収穫に要するだけのを取ってくる。朝から晩まで組別又は部落(小字 saludz, salu) 別で対抗して、子供達が綱引きをする。これはマミスラル組の主権の下である。ほんものの綱引きは午後三時から五時頃の間に壮年の者(女は昔は絶対に入れなかつた)が tsatsuguidan (首を捨てた場所)で行つた」[同書: 239]とし、さらに以下の文章が続く。「この綱引き(masa-surut)は小字別の組対抗で七十名同士或ひはそれ以上で賑かである。幾本もの竹のわつたものを中央は藤で固く結んだものを引きあつた。これを行つたのは、私達が粟刈するときに、このやうに一生懸命に引つぱらねばならぬほど粟が取れるやうにとの意味からである」[同書: 239-240]

アミ族馬蘭社の粟収穫儀礼関連の事例として、次のような記述もある。

「馬蘭社では収穫が終了すれば正月といひ、十二月まで数へてゐる。収穫祭を二月に、七月に『ミサラオ』の行事を、八、九月頃に粟の播種をなす。(中略)粟播種祭(irisin-no-kasaumahan)は最も大きな祭儀である。初日には親戚が本家(tatapagang)に集る。婦女が庭で粟穂を踏んで実を落して種粟の用意をし、子供は太鼓と鐘とを打つて社内を廻る。昼飯は食べない。播いた種を人間の食事を真似して蟲が食つて了ふから禁忌である。夕食は一同で共食する。終れば男子は集会所で角力(オロツ)の試合を行ふ。当社には昔は七個、現在では四個の集会所があるが、その間で対抗した。勝利者はその所属する集会所の誇りであつた。未婚者はもちろん既婚者や老人までも参加した。女子も隠れて見てゐるので、敗北した者は年中人に頭が上らないわけである」[同前: 104]

c. パナパナヤン族の事例

同書第四章「パナパナヤン族の農耕儀礼」のなかでは、同族呂家社の粟あるいは稲の収穫後の行事の一つを次のように記す。

「ついで第二期作(tumohos-kana-paputatili)即ち冬(putilian)に出来る作物の行事がある。稲を播種する時、他人に物を与へることは出来ない。稲収穫期(kakirumalumayan)には刈入中に他人に物を与へない。稲刈が終れば少年集会所の子供等が夕食だけをとつて駆け足の練習をする。数日の後、一同して呂家溪に赴き、一泊して未明に疾走して帰社する。帰社して猿祭(magayagayau)をなし猿を射殺する。それから各自が鳥糞(トリモチ)を手につけて頭髪を掴み合ふ。これをマリウスと称する。

角力(マルブ)に似てゐるが、これには喧嘩して倒れるほど作物が稔るやうにとの願望が含まれてゐる。綱曳や鞆の行事はない。バンサラン組の仲裁でこの競技が終れば、少年等は少年集会所に入つて餅を食べる。それから一週間踊る」[同書: 129]

d. パイワン族の事例

同書第五章「パイワン族の農耕儀礼」のなかには、次のように記述される。

「粟収穫祭(masarut)。それから全部の収穫が終ればマサルトといふ祭祀を行ふ。(中略)マサルトには社外に出てゐる者も全部帰つてくる。そして五日間は畑に出るのは禁忌で、従つて休日であつた。これが終れば畑に出て泊ることがある。祭は二日で、後の三日は男は猟に行く。女は仕事しないで家にあるか、踊があれば晴着で参加する。このときに他社から親戚の者が来る。酒も各戸二三升は作つてゐる。」[同書: 139]

※註(2)「マサルトはパイワン族のいはばお正月である。このとき角力、遊戯などをする。このとき及び五年祭に祖霊に粟酒をあげると穀物を上等にしてくれる。マサルトが終れば狩猟に行く。昔は出草したのかもしれないといふ。但し、五年祭や粟祭等の祭儀に戦争や出草が禁忌であることはいふまでもない」[同書: 139-140]

また、同章のなかの同族大竹高社の事例のなかに、粟祭に際して、その五日目には以下のような事例が認められたという。

「男子は犬を伴つての出猟(qumalup)である。帰つてきて夕刻に徒歩競争をする。勝てば非常に名誉で順位によつて上席に坐して宴会が催される。マサルトの後に出草したとは伝えられてゐない」[同書: 145]

角力同様、徒歩競争は肉体の力比べであり、綱引きも同様と考えてよいだろう。同族の大鳥社(patchaban)の稗祭の事例にも似た記述がある。

「七日目はクマルツで、皆出猟する。集合地(kakupukupuan)と猟を始める所と二回に亘つて集る。そこで頭目がどこへ行けと命ずる。この日帰りには海岸の方へ駆け足で一同下つてくる。これは昔からの習慣である」[同書: 153]

※註(5)「いはゆる成年式(mi-yayang)はこの稗収穫祭の際に行はれる。十六、七、八歳の子供(kakunoyan)を断食させ、夜も昼も躍らせ三里位も走らせる。この式を終るまでは着物もよいのが着られず求愛(キソジュ)することもできない。年長者に会へば小さくなつてゐなければならぬ。この式は頭目家で行ふ。稗祭の出猟の



写真11 1910年頃のパイワン族の角力の様子（註：成田武司『台湾生蕃種族写真帖』より転載）

帰り、壮丁団がササロンといふ名の草を取つて花環を作り、皆な踊る時に新入の子供らの頭に挿してやる。（後略）」[同前]

なお、写真11は既載した成田武司による『台湾生蕃種族写真帖』（1912年）所収の一枚である。成田は「児童の相撲」と題し、「児童集りて相撲の遊戯を催したる実況なり、其方法、強き一名に他の数名同時に飛びかかり組付きて『降参』の言明を以て勝敗を決するものなり、此族の児童は一般に快濶にして勇壮なり、武芸を励むの外又よく勉学を好み、稀れに下山して公学校（中略）に通学するもあり」[成田 1912：82]と紹介している。パイワン族にとって角力は儀礼時に行なわれる遊戯の一つであった。

e. ルカイ族の事例

同書第六章「高砂族農耕儀礼の諸相」のなかで、「ルカイ族大南社（ソクルマク）」の粟収穫後の力比べ的要素を持った事例が次のように記述される。

「各戸の新嘗が終れば新粟を粟倉（riva）に納める。この時は、バリウス及び他の頭目系では檳榔五つチヌラ一つ、社衆は檳榔一つを倉の外に供へて天地の神靈に祈るだけである。その翌日にはアオブカスといふマラソン競争を行ふ。これは身体の鍛錬のためである。この前に青年組は断食（アオライシ）を行つてゐるが、今日は一同が餅を作つて集会所で食べる。それから狩猟（リキリゴル）に赴く」[同書：199]

狩猟が終ると粟祭（toakalalisia, kalalisia）が終つたことを告げ、粟餅を神靈に供えるが、その際の鞆について

の記述が以下である。

「それからは酒を飲み鞆（タライシ）を作つて遊ぶ。鞆は女子が乗り男子はこれを振り動かしてやるだけであるが、楽しみであつたといふ。これは単なる娯楽以上に収穫の饒多を祈る儀礼であるとは考へられてゐない。粟祭を終れば新年を迎へたことになるのである」[同書：200]

e. ツォラ族の事例

同章にはさらに「ツォラ族ララウヤ社の農耕儀礼」の事例が記される。同族が焼畑（pomijo）終了後に粟播種（mi-apo）を行なつたその翌日の様子である。

「子供から老人に至るまで男子は大部分山に出猟して二晩仮泊（mi-okai）する。途中においてトゥトゥナバ（tutun-ava）といふ占ひ（tunpau）する場所があり、ここに一泊する。帰路に際してはまた妻子がそこまで酒、餅を持つて行つて一行に飲食させ、帰つてきてから二日間は『粟播種の飲酒』（soema-miapo）と称して休日である。このとき鞆を作つて乗るが、これは豊作を祈る呪禁であるし、また独楽廻し（ju-sunu）をなすが、これは狩猟の吉凶を卜占する方法である。独楽の頭の向いた方角へ赴けばきつと獲物があるといふ。われらの場合では単なる遊戯とされてゐるものが、高砂族においては未だ呪術宗教的要素と密接に結びついてゐることを特に注目すべきである。これらの行事が終つて愈々粟播種である」[同書：208]

おわりに

台東のブヌン族・温書亜氏、花蓮のアミ族・張念慈氏と陳兆宏氏、台北市のアミ族・萬美芳氏、以上4人からの聞き取り調査の結果から浮かび上がった今後行なうべき追跡調査課題は既述したように明確なものである。そして、本稿では台湾原住民族研究の代表的記録の一つとして古野清人の研究成果の一端を提示したが、当該原住民族に関する研究文献や論文、その他の関連書籍は多数存在する。こうした情報を整理・検討し全体像を俯瞰してみることで、台湾原住民族社会における角力文化を正しく認識し、さらには東アジア全体のなかで相対化していく試みは可能になる。

今後なすべきは、本稿で示した覚書の内容に基づきながら上記のプロセスを進めることである。台湾原住民族社会において本来的には儀礼のなかで、あるいは娯楽の一つとして行なわれてきたであろう角力が、日本の統治

時代を経て日本化したことは間違いないが、自身が民族的アイデンティティとして保持してきたものがたやすく変容したわけではないだろう。そこには、様々な葛藤や苦渋の選択という状況が生じたはずである。そうした過程を経つつ台湾原住民族社会における角力文化は現存している。彼らは角力という文化をいかに捉え、また向き合ってきたのか、さらなる聞き取り調査を行ないながら分析を進めなければならない。また、2013年2月に実施したモンゴルのウランバートルでのモンゴル相撲ブブに関する聞き取り調査で得られたデータも加えつつ、大局的な視野を持ちながら課題と向き合っていく所存である。なお、本稿脱稿後、渡邊昌史著『身体に託された記憶—台湾原住民の土俵を持つ相撲—』（2012年、明和出版）の存在を知った。スポーツ人類学の立場からの論考と思われるが、今後の分析時には参考にさせて戴く所存である。

末筆になったが、現地調査に際しては本学リベラルアーツ学部の卒業生で私のゼミ出身の呉淦瑄さん（台北市）には通訳ならびに現地案内役として大変お世話になった。厚く御礼申し上げる次第である。

なお、本稿は2012年度リベラルアーツ学部共同研究「アジア的身体・思想の形成と獲得過程に関する研究」(研究代表者：山本眞功、共同研究者：渡邊正彦、八木橋伸浩)における研究成果の一部であることを附記しておく。

参考文献

- ・殷允芄編 1996『台湾の歴史—日台交渉の三百年—』藤原書店（丸山勝訳）
- ・王煒昶（撰文撮影） 2004『台湾原住民族祭典的盛會』南天書局有限公司〔台北〕
- ・小泉鐵 1933『臺灣土俗誌』建設社（1997年、南天書局有限公司〔台北〕再刊）
- ・蔡焜燦 2001『台湾人と日本精神—日本人よ胸を張りなさい—』小学館
- ・財団法人廣播電視事業發展基金（製作年不明）『青山春暁 5卑南摔角』〔台北〕（VHS）
- ・周婉窈 2013『増補版図説台湾の歴史』平凡社（濱島敦俊監訳）
- ・鈴木質 1999『台湾原住民族風俗誌』臺原出版社（呉瑞琴編校）
- ・達西烏拉灣・畢馬（田哲益） 1995『台湾布農族風俗図誌』常民文化事業有限公司〔台北〕
- ・成田武司編 1912『台湾生蕃種族写真帖』成田写真製版所（1995年、南天書局有限公司〔台北〕再刊）
- ・日本順益台湾原住民族研究会編 1997『台湾原住民研究への招待』風響社
- ・春山明哲 2008『近代日本と台湾—霧社事件・植民地統治政策の研究—』藤原書店
- ・古野清人 1945『高砂族の祭儀生活』三省堂出版（1996年、南天書局有限公司〔台北〕再刊）
- ・明立國 1989『台湾原住民族の祭礼』臺原出版社
- ・山本春樹、他編 2004『台湾原住民族の現在』草風館
- ・劉還月編著 2001『臺灣原住民祭典完全導覽』常民文化事業股份有限公司〔台北〕

（やぎはし のぶひろ）